

マンチェスターで日本文化を広める

Promoting Japanese Culture in Manchester

ハウズ 優子
HOWES Yuko

Abstract:

The Chairman of Japan Society North West describes her personal experience promoting Japanese culture in the North West of the UK. Although there was a time when she regretted coming to Manchester, she now realizes her purpose is to promote Japanese culture in the area. The level of understanding of Japanese culture varies greatly from person to person. In general, Japanese culture is still not very well known, but she has also learned that there are people who have deep knowledge of Japanese traditional culture and use it to enhance their lives. Her blog, Japan Outpost (www.japanoutpost.org.uk) archives those people's activities. In promoting Japanese culture, Japanese people need to be aware of the uniqueness of Japanese culture and try to acquire better understanding to be able to explain it to foreigners. Toward Tokyo 2020, Japanese people should go back to their own roots and take pride in them, which will lead to the true inter-cultural exchange.

Key words: Japanese traditional culture, Manchester, Japan Society North West, Promoting Japanese culture, 日本の伝統文化、マンチェスター、英国北西部日英協会、日本文化の普及

プロローグ

目が覚めたら、もう8時だった。でも外はまだ真っ暗だ。あれ？私の混乱した頭が記憶を探る。ああ、そうか、私はマンチェスターに来たんだ。そういえば昨日は大変だったんだ.....

私のマンチェスターでのスタートは、こんな風に始まった。2007年に、ポストドックの研究者として、マンチェスター大学に赴任することになったのだが、一月から仕事を始めるということで、着いたのは一月二日。イギリスでは一年中で、一番暗い時期だ。マンチェスターでは誰一人知人がいなかったの、大学のそばのホテルを長期で予約していたのだが、来る二週間前になって、大学から、学部の職員用の職員寮に入れる、と言ってきた。個室でバス、トイレ付、おまけに電話料金とインターネットがただ、というので、それなら、とホテルをキャンセルしてお願いしたのだった。ところが、である。恐ろしく太った管理人の女性が部屋に案内してくれたのはいいが、部屋に入ると、思い切り寒い。暖房が入っていないのだ。私に来ることは、二週間も前からわかっていたのに、私に来る日に暖房ぐらい入れておいてくれたっていいのに。それどころではなかった。ト

イレにはトイレットペーパーもついておらず、ベッドにも布団もシーツもなかった。しばらくするとその女性が、大きいビニール袋を持ってきて、ドン、とベッドの上に置き、「その中にシーツと布団が入っているから、使ってね。」と言って出て行ってしまった。私は長旅で疲れ切っていたのに、一生懸命ベッドを作らなければならないはめになり、そのうえ、近所のスーパーまで歩いて、トイレットペーパーを買いに行かなければならなかった。しかも、部屋には電話さえもなく、もちろんインターネットのコネクションもあるはずもなかった。そうか、電話料金、インターネットがただ、とはよく言ったものだ。これは詐欺以外の何物でもない、と思いながら、その夜は、暖房を入れても少しも暖かくなってこない部屋で、縮こまって何とか眠りについたのだった。それにしても、これほど大規模で有名な大学なのに、まさかここまでひどいとは、と、文字通り毎晩泣いて暮らしていたのだった。そしてその都度思ったのが、私はいったいどうしてマンチェスターなんかに来たんだろう、ということだった。

その答えは、今となってはよくわかる。私はマンチェスターに着いてから三日後に、英国北西部日英協会なるものを発見し、そして六か月後に行われた協会の年次総会に出席したとき、当時の会長と会い、一年後には結婚することとなったのである。それ以後は、夫を助ける意味もあって、ずっと一緒に協会での活動を続けてきたのだ。正直を言って、マンチェスターに来た当初は、日本文化の普及だなどということには、全く興味がなかったのだ。それよりも新しい仕事に慣れることに必死だった。それが夫の影響で、最初はいやいやながら運営委員をやっていたのが、今は自分自身が会長となって活動している。自分で考えても不思議なぐらいである。この事を考えるにつけても、何かいわゆる宿命的なものを感じざるを得ないのである。そう、私は実は、日本文化の普及に携わるためにマンチェスターに来たのだ、と自分ではひそかに確信している。

日本文化理解の程度は千差万別

そういうわけで、英国北西部日英協会を通して、いろいろなイベントを催してきた。協会では、日本文化関連のイベントを毎月一回、そして大規模な「ジャパンデー」を、二年に一回することになっている。今までにやってきたものとしては、太鼓ワークショップ、生け花ワークショップ、茶道のデモンストレーション、漫画ワークショップ、などいろいろある。有名な先生方に来ていただいて、日本庭園についてとか、日本の美術品についてとか、いろいろと講義をしていただくことも多い。先号でお伝えした、宗片先生の能ハムレットも、毎月のイベントとして開催させていただいたのである。

さて、それでは一般的イギリス人の日本文化の理解の程度はどのぐらいであろうか？というところ、これはもう、まったくその人による、としか言いようのないところがある。個人差が非常に大きい。強いて言うならば、一般的には日本文化に対する理解度は低い、と言える。実際、日本文化に通じ

ているとして著名な先生方の中でも、日本人では当たり前知っている事でもご存じない方もいらっしやう。たとえば、こんなことがあった。ある先生が、江戸時代、諸大名が将軍に謁見している絵を見せて、「これは、先に将軍が部屋に入って待っていてから、諸大名が後から入ってくるんですよ。そうでなければ、大名たちが座っている間を歩いていけないでしょう。」と言うのだ。私はあきれてしまった。日本人なら、常識的に思い浮かべるのが、大名たち（あるいは臣下達）が先に部屋に入り、いよいよ将軍が出てくる段になると、例の、「おなーりー」という掛け声とともに将軍が出てくるというシーンである。そのうえ、その著名な先生は、将軍が、大名たちと同じように、下の座から部屋に入ってくると思い込んでいたのだ。私は、その先生の面目を潰すようなことはしたくなかったのだが、その講演に来てくれている一般のイギリス人の人たちに間違っことを覚えてほしくなかったのだ、ついに恐る恐ると手を挙げて、もしかしたらそれは違うのでは、と提案した。NHKの時代劇などでも、いつも将軍が後から出てくるようになっているし、という、「どうしてそんなテレビの時代劇が正しいだなんて言えるんだ！」と一笑に付されてしまった。でも、時代考証もちゃんとしてあるし、と言いたかったが、そこは飲み込んだ。こういうことはままある。ご多分に漏れず、偉い先生方がおっしゃることは皆信用するので、知名度の高い先生方の知識が正しいことを願うしかない。

一般のイギリス人の日本文化の理解の程度が低い、ということは、少し日本に住んでみて、いくらか日本通になって帰ってきたイギリス人たちにもよくわかっていることのように、それを利用している人も少なくない。日本で2、3年英語を教えていて、それなりに日本語が話せるようになった人たちが、イギリスに帰ってきてから、日本語をお金を取って教えたり、あるいは小中学校に向いて日本文化についての講演をする、などと言う事はよくある。もちろんその人によるが、ほんの2、3年で習得できることは、実際の日本人の知識の程度に比べるとはるかに低いので、それを聞くにつけても、一体どんなことを教えているんだろう、と心配になってしまう。まして、そういう人たちは、日本にいる間、一部の地域だけに住んでいたことが多いので、その人たちの知っている日本文化の風習は、ある地域に限られていることが多い。

その一方で、日本文化に対する造詣が非常に深い人たちも、いらっしやるのである。私が英国北西部日英協会を運営してきた中で、一番感謝していることが、これまでに大勢の、そういった方たちに出会う機会に恵まれたということである。しかも、それらの人々のやっていることは、組紐、盆栽、錦鯉、碁、それに和太鼓など、驚くほど様々な分野にわたっているのである。それも、みんなただ趣味でやっているというだけではなく、日本人全く顔負けの知識と熱意を持って、それらの事に取り組んでいるのだ。私が組紐をやっておられるマージさんのお宅を伺った時、家の中に置かれている、丸台や高台に驚いた。日本でも一度も見たことがなかったのに、まるで当たり前のように居間においてあるのだ。いったいどうやって手に入れたのだろうか。マージさんは、毎日のよ

うに丸台や高台に向かい、組紐を作る作業を続ける。そして、組紐を作っていると、心が無になって落ち着く、と言う。もう組紐のない生活は想像できないと言う。またある時は、私は刀剣協会という、日本の刀や鎧を集めている人たちの会にもお邪魔したことがあるが、その専門知識たるや、まさに脱帽で、専門用語は全部日本語、私は日本人なのに、それらの専門用語が全然理解できなかった。それに盆栽協会も驚きだった。その会長のイアンさんにお話を伺ったことがあるが、イアンさんは、何度もイギリスでの盆栽コンテストで入賞したことのある腕前の方だが、たいていは、捨てられていた木とか、庭師の友達が伐採した木の端くれとかを使って盆栽にすると言う事だった。お庭には、所狭しと美しい盆栽が陳列されており、まるで盆栽屋さんに来たかのような感じだった。イアンさんは、盆栽には四つの次元があるとおっしゃった。普通の三次元に加えて、時間の軸というのがあるということだ。盆栽は芸術品なのに、生き続ける、そして、変化し続ける。永久に変化し続ける芸術品なのだ。私はこんなことは、日本にいる間は考えたこともなかった。

これらの人たちはみんな、自分でもわからないが、どこか日本文化と通じる何かを感じて、それぞれの日本文化に造詣を深めていった人たちだ。これらの人たちに会った時、私はいつもまず驚き、そして感激し、そして日本人として自身の知識の浅さを恥ずかしく感じた。でも何にもまして、私は嬉しかった。近頃では日本人でもまずやらないような事を、この人たちはこんなに一生懸命に毎日やってくれて、それをやることによって、自分たちの生活をもっと充実した楽しいものに行っているのである。日本人にとって、日本の伝統文化がこんな風に認められ、有意義に使われているということを知ることは、本当に心から元気づけられることなのだと感じた。驚くべきことに、これらの人たちは、ほとんどがマンチェスター近辺に住んでおられる。マンチェスターという所は、なかなか懐の深い所である。私は、私が感じたこの驚きと感動を、日本人の皆さんと分かち合いたいと思ったので、一人一人を訪れて、お話を伺い、ビデオに撮り、それを私のブログとして立ち上げることにした。名づけて、「マンチェスター日本探検隊 (www.mantan.org.uk)」。「マンチェスターと一緒に日本を探しに行こう！忘れていた日本が見つかるかも……」という副題がついている。あの東日本大震災の後、日本人としてはいろいろと意気消沈することが多かったので、日本人であることを心から感謝でき喜べることを分かち合うことで、少しでも日本人の皆さんを元気づけられるかもしれないと、僭越ながら思ったのであった。よろしければぜひご覧になってください。

日本文化を知ってもらうには

異文化人同士が交流するにおいて、ひとつ考慮すべき概念に、イングループ (In-group) とアウトグループ (Out-group) という、社会心理学の概念がある。イングループというのは、いわゆる「我々」、そしてアウトグループというのは、「彼ら」を指す。家族であれ、クラブであれ、職場であれ、自分の属する方がイングループ、属さない方がアウトグループ、というわけだ。もちろんこれは、イギリス人と日本人にも当てはまるわけで、イギリスにおいては、ほとんどのイギリス人

にとっては、自分たちがイングループであり、日本人はアウトグループということになる。このイングループとアウトグループとがある時、イングループの者にとって、アウトグループに属する人たちは、たとえそれが何百人、何千人という大きいグループであったとしても、みんな均一的に同じだと思いつく傾向があることが知られている。いわゆるステレオタイプもこういう時に使われるわけだ。たとえば、日本人ならみんな背が低い、とか、日本人ならみんなまじめだ、という風に。その反面、イングループの中では、みんなひとりひとり個性豊かで、違う人間だと思っている。

これが日本文化普及においてどう関係があるのかと言うと、次のようなわけである。全く何も日本文化を知らないイギリス人にとって、日本文化、あるいは日本人に関して、最初に受け取った情報というのは、非常に影響力がある。特にテレビなどのマスメディアによる情報だと、たいていの人が盲信するので、一層そうである。そして、たとえそれが特殊なケースであったとしても、日本人はみんなそんなのだと思いつく。ここにアウトグループに対する偏見が働いている。しかも一度学んだ情報は、その人の中ではなかなか変わらない。それを修正するのは面倒だからである。だからこそステレオタイプがはびこることになる。(もちろん個人差があることは言うまでもないが。)それで、先にも言ったように、あまり日本文化の事に詳しくない方々に、「変なこと」を教えてほしくないのだ。特にテレビなどは、あえてセンセーショナルな事を報道したがるので、余計心配である。以前も、普通の日本人ならまず行かないような、奇抜なゲイバーの様子を紹介している番組があった。その番組を見た人なら私に言うだろう、「日本人はみんなああいうゲイバーに行くんですってね。」と。東日本大震災の時でも、津波が町を飲み込んでいる映像が、それこそ5分おきにニュース番組で流れていたもので、何も日本の事を知らない人たちは、日本全土が津波の下に飲み込まれたと思ったに違いない。ほとんどの人が、放射能漏れは一部の地方に限られているとは理解できずに、日本全土がそうなっていると思いつんだらしい。それで、日本から大脱出の号令が、政府から出るほどである。私の知人で日本通のイギリス人は、ちょうどその時に日本にいて、帰ってきてから、「関西地方にいればなんともないのに、あれほど大騒動してみんなが逃げ出すとは呆れた。」と言っていた。

何か問題が起きた時にも、アウトグループの中で起きたとしたら、それはアウトグループの人たちに何か過失があったと思いつく。一方で、イングループの中で何かあったら、それは環境とか、状況とか、どうしようもなかったことのせいだと思って、イングループ内の人を責めないでおこうとする。こんなわけだから、例のオリンパス事件が起きた時には、イギリスに住む日本人としては本当に肩身が狭かった。告発したのがイギリス人だったので、余計日本人には分が悪かった。「日本の会社はみんなあんなの？」ということになってしまう。

こういったバイアスを打ち破ることができるのは、やはり個人的な深い付き合いしかないと思う。たとえば、私の日本人の友達は本当にいい人だったから、日本人がそんなことをするはずがない、といった風なのである。だから、真の意味の文化交流というか、日本の文化を本当に理解して、その価値観を共有してもらうためには、結局、草の根レベルの交流が一番大事であり、有意義であるだろうと思う。

それにつけても身に染みて思うのが、日本から離れているほど、日本の事をよく知っていなければならないという事実である。いったん海外に出たら、日本人ならみんな、日本文化についての生き字引だと思われている、ということを忘れてはならない。日本の事で少しでも知らないことがあると、「えっ、日本人なのに、知らないの?」ということになってばかりになってしまうのがおちである。以前にも、達筆の万葉仮名で書かれた書物をどこかから見つけてきた人が、「これはなんて書いてあるんですか。」と私に聞いたことがある。ええ、そんなことを言われても.... 最終的には読めない、と白状するしかなかったが、それ以後、その人の私に対する態度が変わったことは、想像に難くないだろう。ある時には、お稲荷さんの狐が飾ってあるのを見て、「どうして赤いよだれかけをしているの?」と聞かれ、これにも即答できずに本当に困ったことがある。この後者の例のように、日本にいる間は、みんな当たり前だと思っていて、誰もそれに疑問を持たないだけに、いざ外国でそのことを聞かれると、全く準備ができていない、という事態になるのである。それで日本人としては、日本文化に対していつも好奇心旺盛にして、自ら勉強し続けるようであればならない。

今年は、2020年の東京オリンピックが決まった年であり、これから2020年に向けて、英語教育の強化がいたる所で叫ばれているが、私は特に小学生については、日本語教育の方が大事なのでは、と思わざるを得ない。母国語の能力が高くなければ外国語の能力は伸びない、というのは、専門家の間でも言われてきたことである。日本人として生まれて一番恥ずかしいことは、母国語である日本語を、正しく、美しく話せないことだと私は思う。日本は長期にわたって一民族一国家であったために、日本人には、自分の言語に対する危機感が少ない。このままでは、今に美しい日本語は消え失せてしまうかもしれない。言語だけにとどまらず、あまりにも日本が西洋化してしまったら、もう誰も日本には興味を持たなくなるだろう。日本はいわゆる西洋とはあまりにも違う、ユニークな文化を持つ「不思議な国」だからこそ、みんな来てくれるのだ。私は日本人はやさしすぎる、と思う。他国の文化をそれほど崇拝する必要はないのだ。自分たちの文化にもっと自信を持っているのだ。自身の文化をよく理解し、それに誇りを持ってこそ、他文化との対等な、真の交流ができると思う。日本が、海外に向けて日本文化を発信していこうとすればするほど、自分たちの伝統に立ち返って行くしかないのだ、と言う事を、改めて強く実感している。